

ラジオ放送
〈平成29年1月～3月放送分〉

ON AIR



金光教の声

No.418

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

- 年頭放送 元日の心
金光教教務総長 西川良典 *page 1*

- はじめてのおつかい
岐阜県・南大垣教会 今西信子 *page 5*

<信心ライブ>

- 分かってるけど *page 9*

- 当たり前感謝
愛知県・豊田教会 佐野和子 *page 12*

- 私もあなたも
兵庫県・葺合教会 浅田幸恵 *page 16*

- 心の鏡
徳島県・佐古教会 木村道江 *page 20*

- 記憶にはないけれど
福岡県・北九州八幡教会 野中正幸 *page 24*

<信心ライブ>

- 生かされてあり *page 28*

<先生のおはなし>

- ハッピーマーク
宮城県・仙台南部教会 西川浩明 *page 32*

- 人生の分かれ道
東京都・大崎教会 田中さくら *page 36*

<信心ライブ>

- 喜びの力 *page 40*

<先生のおはなし>

- 神様のシナリオ
広島県・安浦教会 山田泰弘 *page 44*

- 神様の段取り
岡山県・天瀬教会 秋山世喜子 *page 48*

《年頭放送》

「元日の心」

金光教教務総長 西川良典

皆様、新年明けましておめでとうございます。

共々に新しい年を迎えることが出来ましたことをありがたいことに存じます。新たな年を迎えますと、すがすがしく真新しい心地がしてまいります。また、旧年中の起こってきた様々なことを思いながら、今年はどのような年になるのかとあれやこれや思いを巡らせたりもします。

金光教の教えに、「信心は日々の改まりが第一じゃ。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら大晦日と思い、夜が明けたら元日と思うて、日々うれしゅう暮らせば、家内に不和はない」

とあります。

「信心は日々の改まりが第一」とありますが、これは何も信心をするものだけの教えではなく、私たち全ての人の暮らしにも当てはまることのように思えます。例えば、夫婦の間でのことや、親子の間でのこと、会社や学校での人間関係などに置き換えてみても良いと思います。私たち人間は問題が起こってきますと、どうしても心が乱れて自己中心的な方向に向かってしまいます。この「改まり」とは、自分自身の行動や言動を見つめ直し、心から反省することから生まれてきます。そこから、お世話になっている人や物に対して感謝の心を持って接していく心が生まれてくるのだと思います。皆がそのような心持ちになり、日々取り組むことで不和

が無くなっていき、一日一日が大切に過ごせるようになっていくのだと思えるのです。

ある教会にお参りになる女性のお話を紹介してみます。その方のご主人は、ある製薬会社の営業部にお勤めになっています。数年前のことですが、自分の担当するエリアで、売り上げが次第次第に落ちていき、その結果、上司との人間関係がうまくいかなかったのです。初めてのうちは、会社へ行くのに腰が重いという感じだったのですが、ついにはいっそのこと、「会社を辞めたい」と漏らすまでになり、気持ちがいっつもめられていったというのです。

そういう状況ですから、ご主人の目覚めはたいへん悪い。やっと目が覚めても、釈然としな
いのか、三十分近く時間を掛けないと、起き上

がれないというのです。起きることが出来ても、会社に行こうという意欲がわいてこない。ですから、起きたがらないご主人に奥さんのイライラは募り、毎朝けんかばかりしているのだそうです。

そんなご主人の姿を毎日見ていて、奥さんは、「主人に対して、私の出来ることは、一体何であらうか」という発想に立たれました。その時、以前教会の先生から、『目が覚めたら、夜休ませてもらったお布団を丁寧に畳んで、お礼を申しなさい』と言われたことを思い出されたのです。それまで、教えは聞いて知っていたれども、どこまで本気で、お世話になったお布団にお礼が言えていた自分であらうか、と反省をなさいました。

奥さんは、「私が主人に成り代わって、お世話になったお布団にお礼を言わせて頂こう」と思い立ち、ご主人の分、自分の分と二人分、お布団にお礼をなさるようになりました。

そのことが何カ月続いたんでしょうか。次第に、ご主人の目覚めが良くなり、自分で起きられるようになったのです。気持ちが充実し、仕事に対する意欲が以前にも増して出て来ました。今ではご主人は、奥さんよりも早く起き、洗面を済ませ、気軽に音楽を楽しみながら読書をし、それから食事をして会社へ行っておられるそうです。

奥さんがおっしゃいます。「以前のようには、会社に行きたくないというようなことを全く言わなくなりました。気力が充実し、あのころと

同じ人間かと、見間違えるほどです」と、このように先日お話し下さいました。

奥さん自身もそれまでは、何かと病気がちであつたのが、いつしか心身共に健康なお体に回復されたとのことでした。

その女性のお話を聞かせて頂きますと、神様のおかげを頂くには、人の立ち行きを願って、教えに沿って暮らしていくことが大切だということに気付かされます。そうした姿勢になれば、生活の中にはつきりとしたおかげが目に見える形で現れてくるのです。

私たちは、人様には、お世話になれば、お礼を言いますが、衣食住一切には、お世話になっているにも関わらず、なかなかお礼が言えませ

前の教主金光様は、「世話になるすべてに礼を言う心」とみ教え下さっています。天地の恵みを頂いて生活出来ていることに気付き、そのことが「ありがたい」と思える心を大切にしたいと願われているのです。

しかし、実際の生活の中では、何か問題が起こればすぐに不平不足の心が生まれてきて、「礼を言う心」どころではなくなってしまう。そういう状況になっても、少しずつでも手元のところから「お礼を土台」とした感謝の生活になるように、繰り返し取り組んでいくことが、「日々の改まり」につながり、家庭内でも不和のない生活が生まれてくるのだと思います。

私自身が、この「信心は日々の改まりが第一じゃ。毎日、元日の心で暮らし、日が暮れたら

大晦日と思い、夜が明けたら元日と思うて、日々々れしゅう暮らせば、家内に不和はない」という教えを心に刻ませて頂けるようにと願わせてもらっています。

どうぞ本年も、皆様方にとって、ここからの今、今日を大切にして、良い一年となられますように、祈りを込めて、新年のごあいさついたします。



《先生のおはなし》

「はじめてのおつかい」

岐阜県・南大垣教会 今西信子

私には、成人した娘と息子がいます。いくつ

になっても、私の子どもであることには変わりはないのですが、最近はパソコンや携帯電話の使い方など、娘や息子に教わるが増えてきました。

子どもの成長と共に、私も色々なことを一緒に体験し、学んできました。

同じ親から生まれた子どもでも、それぞれ好きなこと、興味のあることが違ってきます。娘は子どものころ、空手を習っていたので、試合の時は一緒に悔し涙を流したり、勝利に抱き合

って喜んだり、娘と共に勝つことの難しさを学びました。また、息子は、昆虫が大好きで、カブトムシやセミ、アゲハチョウなどが羽化する様子を、一緒にワクワクしながら観察し、命の尊さを知りました。

こんなふう子どもと共に成長してきた私ですが、とりわけ忘れられないのが、娘の和賀代が三歳のころに経験した、「はじめてのおつかい」です。

私が、ある日、娘にそれとなく、「和賀代がスーパーにお買い物に行ってくれと、お母さん助かるんだけどなあ」と言うと、娘はいとも簡単に、「私、一人でおつかいに行ってみる」と言うではありませんか。「おー！ ついに我が子におつかいを頼める時が来たかー！」と、

私のテンションは急上昇。と同時に、私から言
い出しておきながら、「一人で行かせても、本
当に大丈夫だろうか…」という不安が、私の胸
に押し寄せてきました。

しかし、せっかく娘がやる気になって成長し
ようとしているのを、親である私が妨げてはい
けないと思い、「娘には神様が付いて下さ
るのだから大丈夫！」と自分に言い聞かせて、
早速おつかいの準備をしました。

ありがたいことに、いつも買い物に行くスー
パーは、我が家の前の道を真っすぐ三百メー
トルくらい行った所にあります。しかも昼間は車
もあまり通らないので、比較的安全です。そし
て何よりも、いつも二人で歩いて買い物に行く
道なので、娘もよく分かっているはず。娘

一人のおつかいには好条件でした。

私は娘に、「それじゃあ、りんご一個と、和
賀代が大好きな納豆を一パック買ってきてね」
と頼んで、スーパーまでの道をもう一度確認し
て、お財布を持たせました。「レジでお金を払
ったら、りんごと納豆とお釣りを、レジのお姉
さんが渡してくれるから、それをもらったらち
やんと、『ありがとう』って言うんだよ」。そ
う言い聞かせて娘を送り出しました。

しかし、ここからが大変です。私は、娘の安
全を確保しながら、娘に見付からないように付
いて行かなければなりません。私は、まるで忍
者のように、路地や電柱に隠れながら娘を見守
ります。

ところが、半分ぐらいまで来たところで娘は

立ち止まり、見知らぬ女性と話をしているではありませんか。私は、忍者から警察官に早変わりし、鋭いまなざしでその女性を見詰め、娘を連れて行くものなら、猛スピードで追い掛けられるよう身構えました。

しかし、私の心配は、程なく解消され、娘は、その女性と別れて、また、すたすたとスーパーに向かって歩き出しました。そしてついに無事スーパーに着きました。私がお店の窓から中の様子をうかがっていると、娘は難なく買い物物を済ませ、店を出て元気に家に向かって歩き出しました。

私は、ぎりぎりまで娘を見守った後、大急ぎで先回りして家に戻り、玄関で、帰ってくる娘を待ちました。娘は、満面の笑みで、「ただい

まー。りんごと納豆、買ってきたよー」と、スーパーの袋を差し出します。私は無事に帰ってきてくれたことに安堵しながら、「ありがとう。和賀代が買ってきてくれたから、お母さんすぐ助かったよ」と言って、思わず娘を抱き締めました。

すると娘が、「私、途中でスーパーに行く道が分からなくなっちゃったの。歩いてても歩いてもスーパーが無くて、だから、知らないお姉さんに、『スーパーどこですか?』って聞いたの。そしたら、『ここを真つすぐ行ったらあるよ』って教えてくれたから、ちゃんと行けた」と言うのです。

私は、「えー!? いつもお母さんで行ってるし、一本道やん」と言いそうになりましたが、

きつと娘は一人で心細く、いつもよりスーパーがとてもとても遠くに感じたのだと思い、「そっかあ。ちゃんと道を聞くことが出来て、偉かったね」と言いました。娘のはじめてのおつかいはハラハラ、ドキドキの連続でしたが、親子共々神様に見守られ、どうにか無事に終わりました。

あれから二十年余り経ちましたが、大冒険に臨む娘を祈りながら見守ったことが、昨日のことのように思い出されます。

我が子のちよつとした動作にも目を凝らし、無事を祈らずにいられない、切ないまでに愛しい気持ち。これが子を持つ親の心なんだなあと、改めて気付いたのです。きつと私も、そんなまなざしで見守られながら育てられてきたのでし

よう。そして更に、神様もまた、私たち人間のことを、こんな親心で見詰めて下さっているのだらうと深い感動を覚えたのでした。

私は、初めてのことにチャレンジする時や、自分の進むべき道が分からなくなった時、不安で立ちすくんでしまうことがあります。でもそんな時には、いつもこの日のことを思い起こします。そして、神様がじつと見守り、応援して下さい下さっていることを確信した時、前に進もうとする勇気が湧いてくるのです。

さあ、今日も一日が始まります。今日はどうんな「はじめて」が待ち受けているでしょうか。



《信心ライブ》

「分かってるけど」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録

音で紹介する「信心ライブ」。今日は、大分県

日田教会の堀尾光俊さんが、平成二十七年一月

に、金光教本部でお話されたものをお聞き頂き

ます。

下関にフグで有名な、唐戸市場という市場が

あります。ご存じの方、ありますか？

そこにおすし屋さんがありまして、私も以前

行ったことがある。そこに入りましたらね、も

う最初に目に飛び込んできた。何かと言いまし

たらね、従業員が全員白いＴシャツを着てるん

ですよ。そのＴシャツの背中に、毛筆体の筆字

で「はい、よろこんで！」って書いてある。中

ですしを握ってくれるあんちゃんたちは、法被

みたいな物を着て、その背中にやっぱり「はい、

よろこんで！」って書いてある。

ほう、なかなかいい言葉を書いてあるなと思

って、生ビールを注文した。「あっお姉さん、

生ビール一つ」「はい、よろこんで！」って持

ってくる。「あ、ちょっとトロ握って」「はい、

よろこんで！」。もうこれがね、決まりなんで

すよ、そのお店は。それはおそらく、店長だけ

上司の営業方針でそういうふうに店員教育され

ているのかもしれないけどね、聞いてて悪い

気がしませんよ、ほんとに。

嫌々持ってこられるよりね、元氣のない声で、
「はい、いらっしやい」なんてより、何を頼んでも元氣よく、「はい、よろこんで！」。「おかわり」って言ったって、「はい、よろこんで！」と持ってくるなら、これは氣持ちがいいですよ。これはいいなあと思った。一緒にいた家内もそう思ったらしい。

それで私と家内が帰ったその日から、「お父さん、私たちもやろうか」「そうね」「お茶」「はい、よろこんで！」。「お父さん、今朝ゴミ出しとって」「はい、よろこんで！」。まあ、あのね、二日くらいは何とかなる。ねっ。
一週間もちませんでしたね。着眼点は良かったけどね。

「まあ俺たちはいちいち言葉に出さんでも、

心で感謝しているからいいか」とか何とか言いながらね。

分かっているけど出来ない。分かれば出来てよさそうだけれども出来ない。信心は、分かるということと、出来るということは別なんです。だから出来る稽古がいるということなんですよ。

ところが分かっただけで出来ている気になる、これが一番危ない。これが一番危ないですね。ある時、足元をすくわれる。

教祖様のご理解で私が好きなのがね、「信心する者は、山へ行って木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれよ」と仰っている。

「礼を言えよ」じゃないでしょ。「礼を言い

なさいよ」「じゃないんですよ。「礼を言う心持ちになれよ」。これが、もし、「木の切り株に腰をおろして休んだら、立つ時には礼を言えよ」なんていうご理解だったら、きついし、うるさいし。思いませんか？

教祖様は、私たちが出来ないことを百も承知なんです。だから、あえてそういう心になるように努力しなさいよ。心掛きなさいよ。かばって、かばって、かばって、かばって下さっての、み教えじゃないですか。私、それがありがたいんですよ。

「礼を言うような心になれよ」と仰っておられる。ならば、一回二回三回忘れてもいいじゃないですか。思い出したら、「そうだ、ありがとうございます」といいます」って言えばいいんだ。そうで

しょ。そういう私たちだということは神様も「承知だから、私たちはどうすればいいか、そこにあぐらをかくんじゃないで、」どうぞ少しでもお礼が申せる私にならせて下さい。お礼が本物になりますように気付かせて下さい。おかげを頂かせて下さい」という祈りが出来るということじゃないですか。

いかがでしたか。

「信心する者は、山へ行つて木の切り株に腰をおろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれよ」。これは、金光教では大変に有名な教えです。しかし、堀尾さんの今のお話を聞いて、「礼を言えよ」ではなく、「礼を言う心持ちになれよ」という教えであることに改めて

気付かされました。お礼を言えるような自分にならせてもらおうと心を磨いていく、その姿勢にこそ、この教えの大切なところが示されているんですね。

お話の中で、「分かっただけで出来ている気になるのが、一番危ない」とおっしゃっています。情報社会と言われる現代は、ますます情報があふれ、いろいろなことを分かっただけで出来た気になっているのではないのでしょうか。私も例外ではありません。皆さん、そんな自分に気付いたら、是非今日のお話を思い出してみて下さい。

では、最後まで聞いて頂き、ありがとうございました！

ありがとう!



《先生のおはなし》

「当たり前前に感謝」

愛知県・豊田教会 佐野和子

「毎日学校に行けること、ご飯が食べられること、普通のことが出るのは、すごいことなんだね」

これは、現在二十一歳になる長男が小学二年生の時、一カ月ほどの入院生活を終えて、登校した日の言葉です。

十三年前のある朝、発熱して腹痛があったので、学校を休んで安静にしていました。二日ほど様子を見ましたが変わりないので、掛かり付けの小児科に行くと、「胃腸風邪」と言われ、薬をもらって帰りました。

ところが、その夜、転げ回るほどの激しい腹痛がありました。翌日、また病院へ行き、レントゲンを撮ってもらいましたが、特に問題はありませんでした。嘔吐や下痢もないのに胃腸風邪なんだろうかと不審に思いつつ、翌日、近くの小児科に行き、昨日までの状態を話し診察してもらいました。「特に異常は見当たらないけれど、腹痛が気になるから総合病院に行ってみて下さい」と紹介状を渡されました。

総合病院で検査を受けましたが、やはり気になるところはないとの診断でした。痛みのない時は本を読んだり、テレビを見たり、弟と遊んだり出来るのですが、痛み出すと七転八倒するので、治まるまでは見守るしかないのです。

明け方また腹痛が起こり、嘔吐する気配があ

ったので、「やはり胃腸風邪だったのか」と思いながら、用意しておいた洗面器で受けました。でも私の目の前に出てきたものは真っ赤な血でした。びっくりしてすぐに病院に電話をすると、「胃潰瘍いはいようかもしれないので連れてきて下さい」とのこと。

胃カメラの検査や血液検査など、複数の検査の結果、アレルギー性紫斑病しはんびょうだと分かりました。

溶連菌感染症ようれんきんかんせんしやうにかかり、アレルギー性紫斑病を発症してしまったのです。ペン先で「チョン、チョン、チョン」と突いたような出血斑は、おしりや太もも、膝の裏、ふくらはぎという下半身の裏側に出るために気が付かなかったのです。激しいお腹の痛みも紫斑病の症状でした。

主治医の先生は、「溶連菌がのどに付き、体が治そうとして他の所に影響が出る。それがアレルギー性紫斑病だと思う。胃から血液が出たので胃を疑ったけれど、うちで初めから診察をしても胃腸風邪としか言えなかったでしょう」と言われました。出血斑、関節の痛み、腹痛がある間は安静が必要なので、トイレなど、院内では、全て車椅子を使わないといけません。

空気清浄が常に行われている病棟で、点滴による治療から始まりました。



毎日四十分掛けて点滴を入れるのですが、薬の副作用により、満腹感を感じる事が出来なくなり、目にした食べ物は何でも口にしてしまい、吐くまで食べてしまうのです。さらに、吐いても食べてしまうので、注意が必要でした。

二週間ほどで痛みは治まりましたが、出血斑が消えないので、一カ月ほどの治療となったのです。

痛みが取れると学校の先生から届けられるプリントを持って、院内学級で勉強することが出来るようになりました。でも、車椅子の生活なので、段々と不満を言うようになりました。

家族の多い普段の生活では、日常の家事に追われ、息子と向き合う時間も少なかったため、入院生活は、私にとって貴重な時間となりました。

た。息子も学校のこと、友達のことなど、いろいろと話をしてくれました。

私も息子にこんな話をしました。「夜が明け、朝日の明るさで目覚めること、洗面所やトイレに行けば、蛇口をひねるだけで水が出ること、時間になると温かい食事が運ばれてくること。

それは多くの人のお世話になってるけれど、それよりもっと前に、神様から日差しや水というお恵みを頂いて生活出来ているのだから、当たり前のことと思わず、お礼の気持ちを持って使わせてもらわないといけないよ。学校にも元気な体でないで登校出来ない。元気な体を作るには、神様のお恵みのお日様を浴びて育った野菜や肉を食べて栄養を身体に蓄えないといけないのだから」。息子は黙って聞いていまし

た。

息子も私と話をしたり、入院されている周りの方を見たりしているうちに、友だちと走り回ったり、自分の思うように出来ることは、決して当たり前なことではなく、とてもうれしいことなんだと思えるようになったのです。

先日、高校生の次男が友達の家泊まりました。帰ってきた時、「お母さん、友達の家では、朝起きたらそのまま食事するよ。着替えも歯磨きも食事してからするんだって。うちの家は、起きたら歯磨きをして、着替えてから食事するけどどうして？ 食後に歯磨きをした方が良くないから、僕も友達の家みたいにしても良いかな？」と尋ねてきました。

そばで聞いていた長男が、「うちは、朝起き

たら神様に、元気で朝を迎えたことをありがとう
うございます。つて挨拶に行くんだから、汚れた
口やパジャマのままでは行かれないだろ。今日も
元気に学校に行ける体をもらっているんだか
ら、ありがとう。ございます。と言わない」と
答えてくれたのです。入院は十三年も前のこと
ですが、毎日の生活の中で当たり前のことを喜
ぶことがずっと出来ていることをありがたく思
いました。

当たり前のように過ごしている日々の中で、
常に神様のお恵み、生
かしてもらっている
という「ありがたさ」を
忘れずに過ごしたいと
思います。



《先生のおはなし》

「私もあなたも」

兵庫県・葦合教会 浅田幸恵

自分の周りの環境が変化して、人間関係に戸
惑ったことはありませんか？ 人生の中で、人
それぞれ周りの環境が大きく変わることがある
と思います。

私の一番の環境の変化は結婚でした。まず8
年間勤めた仕事を辞めなければなりません。私
た。そして東京から神戸に引っ越しました。私
は熊本県出身でもともとは熊本弁を話していま
したが、こちらは神戸弁です。理解出来ない言
葉がいくつもありました。また、一人暮らしか

ら、夫の祖母、両親と同居を始めました。郷土の文化の違い、さらに家の習慣の違い、まるで外国でホームステイをしているかのような気分でした。

そして何よりも、結婚したことで名字が変わりました。運転免許証、パスポート、銀行や郵便局の口座、クレジットカードの名義変更をしなければなりません。「いつたいこれ、いつ終わるの？」と、うんざりしてしまいました。

さらに、名義変更の手続きを進めていくうちに、自分でも予想しなかった気持ちに襲われました。それは、三十二年間使っていた名字が、新しい名字に変わっていく度に、これまで生きてきた今までの自分が無くなっていくようで、とても悲しく、だんだん喪失感を味わうように

なっていたのです。

そのような変化に加え、これまでのライフスタイルの違いからか、私は夫の考えも理解出来なくなり、イライラすることが多くなりました。

ストレスがたまり、夫が私の思い通りに行動してくれないと、怒りをぶつけるようになりました。本当はそんな風になりたくないのですが、自分がコントロール出来ず、どうしたらいいのかわかりませんでした。

そのような時、金光教の前の教主が詠まれた「ちちははも 子どもとともに生れたり そだたねばならぬ 子どもちははも」というお歌を何かの冊子で見掛けました。そしてそこには、「親は子どもが生まれて初めて親になる。親子は一緒に成長していくのである。良い子ども

になるようにお願いするのも大事だが、良い親になるようにお願いしなければならぬ」というようなことが書いてありました。

私はこれを読んでふと、「夫婦も同じだな。結婚して初めて夫婦になる。夫がいるからこそ私は妻でいられるのだな」と思いました。

そして、この教えのように神様にお願いしたら、仲の良い夫婦になれるかなと思ひ、神様にお願いしてみました。

まず自分のことを、「良い妻にならせて下さい」とお願いして、次に「良い夫にならせて下さい」とお願いし、最後に「良い夫婦にならせて下さい」とお願いするようになりました。

そうすると夫がいろいろと気遣ってくれていることに気が付くようになりました。夫は食事

の後片付けを手伝ってくれます。洗濯をしたら、「ありがとう」と言ってくれます。私が風邪を引いた時には、献身的に看病してくれます。いつも私の味方をしてくれます。そのような思いやりを感じる事が出来るようになり、私の心もだんだんと落ち着くようになってきました。

これまでは夫に対して、「こうして欲しい。ああして欲しい」とばかり思っていました。しかし神様にお願いするようになってからは、「私がかの家族の中に入るのは大変だ。でも夫も私のことを家族の中に受け入れるのは大変なのかもしれない」と、お互いに思いやりを持つことが大切なのだと気が付きました。

そうして生活していくと、次に気になってくるのは義理の父と母です。特に母とは、一緒に

食事作りや掃除、片付けなどをします。しかしながら、私と母では味付けの好みが違うのです。卵焼きで例えると、私は砂糖をどっさり入れて甘くする味付け、母はだしをきかせた、いわゆるだし巻き卵の味付けです。掃除や片付けのやり方も違います。ほんの小さなことですが、今まで自分がしてきたやり方をやめるといっては、結構大変です。嫁と姑なので気も使います。私は出来るだけ合わせようとはしましたが、内心では、「大変だなー。自分のやり方に戻したい」と思っていました。

しかし、先ほどの夫婦のお願いをしているうちに、ふと気が付いたことがあります。それは、「今まで自分ばかりがお母さんに合わせていると考えていた。でも、もしかしたら、私の

気が付かないところで、お母さんが私に合わせ

てくれているのかもしれない」ということです。そこで義理の両親とも仲良くしていきたいと思いい、また神様をお願いすることにしました。まず私たち夫婦のことを、「良い子どもにならせて下さい」。そして次に両親のことを「良い親にならせて下さい」とお願いし、「良い親子にならせて下さい」とお願いするようになりました。そして最後に、夫婦が夫婦として、親子は親子として、一緒に成長していきたい、そう願って、「良い家族にならせて下さい」とお願いしています。

環境の変化に自分を合わせていくことは大変です。つついっついでに、「もっとこうして欲しい。ああしてくれたら」という気持ちになっ

しまいます。でもきつと、周りの人も合わせてくれていることがあるのではないのでしょうか。そのことに気が付けば、周りの人と新たな関係を築くスタートになると思います。

お互いに思いやりを持ち、お互いに成長することを願っていく。私だけでもなくあなただけでもない。私もあなたも一緒に成長していくことが、良い人間関係を作っていくことになると思います。



《先生のおはなし》

「心の鏡」

徳島県・佐古教会 木村道江

「まあた、こんなに散らかして！ ちよつとは自分で片付けなさい！」と、母の声。私は子どものころから、整理整頓が大の苦手。「片付けないといけない」と頭の中では思っているけど、面倒臭いが先に立ち、出したら出しっぱなし。使ったら使いっぱなしで、母親からよく叱られていました。

まだ私が小学校の高学年だったころの話です。ある日、授業が終わって学校から帰っていると、部屋の中がいつになく奇麗になっていることがありました。散らばっていた本たちは本

棚に奇麗に整えられ、出しっぱなしになっていたゲーム機はきちんと収納箱に片付けられているのです。

「そのうち自分でするから！」という、いつになっても実行されない私の言葉にあきれた母親が、とうとう、私のいない間に、部屋を片付けてくれていたのです。

「うわー、母さんも忙しいのに…ごめん、ありがとう！」と思いつつ、奇麗になった自分の部屋で、優雅にくつろいでいられたのもつかの間。しばらくすると。「あれ？ 置いてあったはずのプリントが見当たらない。明日学校に提出なのに。どうしよう！」と部屋の中をウロウロ ウロウロ、探し始めることになったのです。

自分なりにどこを探しても、何度探しても、全く見つかる気配がありません。次第にイライラと怒りが募っていき、探す手つきもどんどんと雑になっていきます。そしてついには、「ちよっと母さん！ プリントどこにおいたん！？ 明日提出なのに見付からんでえ！ 勝手に人の部屋の物、触らんとつてよ！」と、親に向かって怒り心頭、大爆発です。つい先ほどまで、「ごめんよ、ありがとう！」と思っていた反省や感謝の気持ちも忘れて、ただひたすら、自分の怒りをぶつけます。

一通り責め立てて、気持ちが落ち着いたところになると、「あ、そういえば自分でここに片付けてたんだっけ」と、ふと思いつき出し、探し物は出て来ます。

こうなってしまおうと、「あゝ。あそこまでひどいことを言わなければよかった。お母さんも良かれと思って片付けてくれたのに」と後悔するやら、気まずいやら。けれども、もう、後の祭りです。

このように、私は度々、腹が立つてカツとなると、周りの状況が見えなくなつて、自分のことを棚に上げては、相手を責めてしまうことがあります。

何度もこれではダメだと思つて反省しても、どうしてもやめられないのです。

そんな私は、金光教の教会に生まれ育ちました。大学を卒業し、地元の会社に勤めるようになったところ、私は毎日、夜、神様に向かってお祈りをするようになっていました。その日あつ

たことや、家族のこと、自分のことなど、何でも神様にお願ひします。そうすると、大体落着いた気持ちになれるのです。

ところがある日、友人のちよつとした態度がどうしても許せず、教会でお祈りをしている時でも、ずっとイライラが収まらない、というところがありました。いくら心を鎮めようとしても、頭の中は友人のことではいつぱい、今にも爆発してしまいそうになります。ただひたすらじっと目をつぶり、「神様、イライラが止まりません。どうかかけて下さい」と何度も何度も繰り返してお願ひをしていました。

それからしばらくして、ふっと目を開けた瞬間、目の前に、まるで鬼のように恐ろしい、真っ赤に怒った顔がパツと見えた気がしたので

す。本当に一瞬のことでした。

私は、「今の顔は、私の心の中の顔に違いない！」と確信し、「今まで、私はこんなに怖い鬼のような心になっていたのか」と、自分が恐ろしくなって、友達への怒りもどこかへ飛んで行ってしまったのでした。

金光教の教祖様は、「心の中には鏡がある。

その鏡は腹が立つと曇ってしまうぞ」ということを言われています。曇っている鏡には、腹を立てた自分の姿なんて、映るはずがありません。

しかし、「神様、どうかして下さい！」と心の底から願った私に、神様は一瞬だけ鏡の曇りを取り払って、その恐ろしい自分の心の姿を、特別に見せてくれたのだと思いました。

それ以降も、もちろん腹が立つことは何度も

あります。しかし、カッと爆発しそうになる時、

あの、鬼のような顔を思い出しては、「いけない、いけない、また鬼の心になっているぞ」と自分に言い聞かせ、心を落ち着かせるようにしています。そうすると、相手を責める前に、自分の至らないところに気付いたり、相手の言い分を違う視点から受け取ることが出来るようになったりと、少しずつ、昔と比べて怒りに任せってしまうことが少なくなってきたような気がします。

毎朝、顔を洗う時や化粧をする時、鏡をのぞくと、当たり前ですが、そこには自分の顔が映っています。たまに、自分でもびっくりするくらい、疲れた顔が映るのですが、そんな時、私は鏡を見ながらニコツと笑い、笑顔を作ります。

そうすると、なんだか少し、心が元気になる気がするのです。心の中の鏡に映る自分の姿。どうか、鬼なんかにならず、いつもきらきらと輝いて笑っていて欲しいなあと思います。



《先生のおはなし》

「記憶にはないけれど」

福岡県・北九州八幡教会 野中正幸

金光教の教師であった私の祖父は、五十九歳で亡くなりました。祖父は亡くなるまで、私が生まれ育った教会の教会長として、奉仕していました。とても穏やかで優しい人であったようです。

亡くなったのは、今から三十五年前、私が三歳になったばかりのころです。残念ながら、私は祖父のことを全く覚えていません。一枚だけ、亡くなる少し前、祖父と共に映った写真があります。やんちゃやそうに笑う幼い私と、その横で優しく微笑む祖父。しかし、その体はほっそり

と痩せて、頬も少しこけているように見えます。

ある日、この写真を家族や親戚の皆と見ながら、祖父の思い出話になりました。ある方が私に、このようなお話をしてくれました。

「おじいちゃんが亡くなって、火葬場にいた時に、みんなとても悲しんでいたんです。五十九歳、まだまだ若い。どんよりとした雰囲気の中、三歳のあなたがみんなの前で、『ねえ、みんな元気出そうよ、がんばろう』と言ってくださいましたよ。それで、『そうだね、泣いていてもしようがない。元気出していこう。前を向いていこう』。そう思えたんですよ。これは亡くなったおじいちゃんが、『悲しむのはもうやめて、元気出していきなさい。おじいちゃんは、いつもちゃんとそばにいて、みんなを見守って

いるよ』と、あなたの口を通して、言って下さったのかもしれないね」。他の方々も、「そうだったね、元気付けられたね」と、その思い出話は盛り上がりを見せました。

当の私は、三歳の時のことで、全く記憶にありません。皆の前で、「元気出そうよ、がんばろう」などと言ったなんて、自分のことではないような、何だか居心地が悪い気持ちです。私は、「まあ子どもながらの無邪気な発言ですよ」。そう返答し、その思い出話は終わりました。

この話を聞いた時、私は二十代後半のころで、会社で働いており、忙しくも楽しい毎日を過ごしていました。自分の好きなように働いて、「自分のことで忙しい」と、先祖の御霊みたま様に手を合

わせお参りすることも、ろくにしていない状態です。家族ともほとんど関わらないような生き方をしています。そんな中、この昔の話が頭から離れなくなり、ぼーっと考える時間が増えてきました。

「みんなは、三歳の時の私の話をあんなにうれしそうにしてくれる。よく覚えているもんだな。幼い私は、みんなを元氣付けることが出来た。じゃあ、今の私はどうだろう？　じいちゃんはそのんな今の私をどう見ているだろう？」。そう考えるようになってきたのです。

それまでは、生まれ育った教会や家族に対して、ここまで育ててくれた恩があるにも関わらず、感謝の気持ちも全くなく、自分一人の力で生きてきたような意識でした。しかしそうでは

なく、先祖の御霊様や家族とのつながりの中で、様々にお世話になりながら、私はここまで育てられてきたのだ。そのように、教会や家族への恩というものに、その時初めて気付かされたのです。

そしてだんだんと、「私が進むべき道は、じいちゃんのように穏やかで優しい金光教の教師になれるよう、求めていくことではないか。それを皆はずっと待っていてくれたんだ」。そう思うようになりました。そして、時期をみてそれまでの会社を辞め、これからは家族と共に、教会で奉仕していくことを決心しました。

この思い出話の一席が、私の生き方を変えるほどに、大変意義深いものとなりました。そして、昔のことを思い出して相手に感謝を伝える

この大事な事を思い出しました。「あなたのおかげで元気が出たよ、助けられたよ」「昔、あなたがこういうことをしてくれてうれしかったよ」。そういった思い出話をする事です。

時に、自分でも覚えていないことや知らなかったことを伝えられ、大事なことに気付かされることもあるでしょう。感謝された方が、逆に感謝したい気持ちになるようなこともあるのだと感じたのです。

後に、このことをある金光教の教会でお話する時がありました。すると、その教会の先生が、「懐かしい思い出話から、自分を見つめ直すことが出来たことは、決してあなただけの力ではなく、亡くなったおじいさんを始め、みんなが、あなたのことを神様に願って下さっていたから

です。様々なお世話を頂いて生かされているのだということ、あなたに気付いて欲しい。そういう神様に向かつての強い願いがあったからこそ、あなたがそのような心になったのです」とお話しして下さいました。

ハッとさせられました。亡くなった祖父を始め皆が、いつも私のことを神様に願って下さり、その強い願いがあったからこそ、私は自分を見つめ直し、心を改めるきっかけとなったのです。人のことを神様に願うことの大切さを強く感じました。

祖父の姿は記憶にはありませんが、いつも祖父の温かさを感じます。日々、写真の中の祖父に向かつて、うれしかったことや悲しかったこと、いろんなことを話しかけます。

「じいちゃんはいつもみんなを見守っているよ。みんな元気だそうね」と言ってくれているかのように、祖父は写真の中で、いつも優しくほほ笑んでいます。

そして私も、「どうぞこれからも、じいちゃんを始め先祖の御霊様が喜ばれるような生き方に、家族皆でならせて下さい」と、願う毎日です。



《信心ライブ》

「生かされてあり」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、神戸市長田区にある金光教尻池教会の谷口忠道さんが、平成二十八年四月、阪急塚口教会でお話されたものをお聞き頂きます。

谷口さんは現在七十四歳。教会長として、教会を訪れる方々の悩みや苦しみに向き合っておられます。年を重ねた谷口さんが、改めて今、若い日のことを振り返ってお話されています。

実は、私がいつも、「今の今おかげ、ご神徳

の中」というような思いにならせて頂いた出発点はですね、学生時代に、腎臓病を患うておりましてですね、毎日がうつむいた生活をしておったというところがあるわけです。

友達なんかはみんな元気で大学生活を楽しんでおる。私は、もうずっとうつむいて生きておると。それで私は中国語を勉強しておったんですよ。商社へ行って、まあ、そういうところで仕事をしたいなあと、そんなふうに思っております。

ところが、腎臓病になりました、もうそういう将来の道と言うのか、夢と言うのか、それが、ああ、これはもう駄目だなあと。そうしたら、何を目的に生きて行きやあいなんだと。何を目的に勉強すりやあいなんだというところで、な

かなかね、自分自身のところで、つかめないんですよ。それでもう、毎日毎日、つらいですね。暗い生活を、学生生活をしておったということです。本当に、希望のない一日一日であったなあということであります。

それで、そういう希望のないつらい一日一日を過ごしていくということの中で、精神的にですね、非常に追い込まれていくんです。

人間弱いもんです。もうそういうことになりましたら、悪い方に悪い方に考えていきます。それでついには、死というものを考えていきます。

まあ、そういうところにいたわけですよ。私の生まれたところは金光教飾磨教会です。だから、ご神前があります。そのご神前に、小さな

教典が置いてあるんです。それで私もその教典

を取りました。それで、教典を取りましてですね、この、パツと開けたら、どういうみ教えが出て来たかと言うたら、「疑いを放れて広き真の大道を開き見よ。わが身は神徳の中に生かされてあり」。こういうみ教えが出てきたんですよ。すごいと思いませんか？

それですね、あのー、皆さん、信じてもらえるかなあ…。このみ教えに出会ってねえ、私は本当に、抱かれてしまったんですよ。

「わが身は神徳の中に生かされてあり」。「神徳の中に」という意味は、まだ分かりません。その時は。それでも、「生かされてあり」という、そういうみ教えにですね、本当にね、抱かれました。それで、ある意味、助かってしま

ったんですよ。

というのは、それまでは、今日一日、今日一日、僕はどうやって生きていったらいいんやと、そういうところで、生きる希望を、なかなか見付けることが出来ない。

ところが、この教えでは、「生きる」ということではなしに、「生かされてあり」と。「神徳の中に生かされてあり」。こうなんですよ。そしたら私はね、「ああ、もう生きよう、生きようと思うて、もがかんでもええんやなあ」という気持ちになりました、もう、抱かれていったらええんやな、生かされていったらええんやなあという、そういう気持ちになってしまったんですよ。

これは、すごいねえ。み教えのねえ、お徳で

すわ。すごいなああと。それで、こういうみ教えに出合うということの中でね、親が一生懸命ね、私が腎臓病やということ知っておりますから、だから、ずーっと祈ってくれておった。親がそういうように祈ってくれておるいう、取次の祈りを受けてね、私は、そのみ教えに出合うことが出来たと、そういうことであります。

いかがでしたか？

若いころの病気。そして、その病気をきっかけに陥った、生きる望みを失った、心が沈む毎日。ゆっくりと言葉を紡ぎ出し、噛み締めるように話される静かなお話しぶりから、若い日の谷口さんの苦しみが、ひしひしと伝わってきました。

今、年を重ねた谷口さんからにじみ出るように伝わってくる安心感は、「神様のお徳の中に生かされているんだ」という実感に支えられて生きてきた、その人生の歩みに裏打ちされていることは間違いありません。

人は、困難にぶつかり、つらさを抱えた時、生きる希望を失いがちです。そんな時こそ、ふっと一息、深呼吸をするように、「わが身は、神徳の中に生かされてあり」という言葉をつぶやいてみて下さいね。



《先生のおはなし》

「ハッピーマーク」

宮城県・仙台南部教会 西川浩明

どなたか心の豊かな人が名付けたのでしよう、アザのことを「天使のしるし」とか「神様がつけたハッピーマーク」とか言うそうです。

大人になると周りの視線をあまり気にしなくなるのか、それとも気にする余裕がなくなるのか、すっかり頭から離れていましたが、ふと、私にもハッピーマークがあることを思い出しました。

私が小学生のころのことです。夏休みに、家族旅行先で食堂に入りました。運ばれてきた豪華な食事を両親や兄弟たちとおいしく頂いてい

ると、ふと、斜め前に座っている同い年くらいの女の子が、こちらをチラチラと見ているのに気が付きました。その表情は険しく、どこか不安そうでした。この女の子は何を気にしているのだろうか：と少し考えて、ハッと気が付きました。「僕の左腕を見ているんだ」。

私の左腕には、腕全体に広がる点々模様の大きなアザがあります。生まれつきのアザですから、痛くもかゆくもありませんし、体の機能的にも何の問題もなく、それまで特に意識することはありませんでした。しかし、その時、女の子が私の左腕を見て気持ち悪がっていることがはっきりと分かり、私は、とっさに自分の左腕が女の子から見えないよう、テーブルの下に隠しました。さつきまでおいしく頂いていた食事

の味が、口の中からスーッと消えていくような気がしました。

私がアザを気にするようになってからしばらくして、学校の校庭で友達と遊んでいると、大して仲良くもなかった子が私のそばに来て、「その腕どうしたの？」と聞いてきました。私はドキッとしました。その瞬間、あの食堂にいた女の子のいぶかしげな表情が目に浮かびました。

「…生まれつきのアザ」

「ふん…」

その子は、まじまじと私の左腕のアザを見続けています。

ああ、やっぱり僕の左腕はみんなと違って変なのだ。このアザをみんな本当は気持ち悪いと思っているんだ。私はとても暗い気持ちになり

ました。

「…やっぱり気持ち悪い？」

恐る恐る小さな声で聞いてみました。

すると、意に反して、その子はパッと明るい顔になって言いました。

「ぜんぜん、気持ち悪くないよ！むしろ気持ちいい！」

その子は、私の左腕をつかむと、撫でたりさすったりしました。「すべすべだあ〜！」と笑いながら、犬がじゃれているみたいに頬ずりまでしてきました。

そこまでされると逆にわざとらしくも感じましたが、「わあ、くすぐりたい！やめてくれよう〜！」とその子を引き剥がそうとした私の顔は、もうすっかり笑顔になっていました。気に

していたアザを、「気持ち悪くないよ」と言われたことが単純にうれしく、ましてや、今まで一緒に遊んだことがなかった子と、アザがきっかけで仲良くなれたのですから。

人は誰でも、異質なものの、知らないものを怖れ、避けようとします。子どもであればなおさら、見るものほとんどが初めてだらけで、見て感じたことは露骨に顔に出ます。

その子だって私の左腕を見て、最初は気持ち悪いと思ったかもしれません。しかし、きっとその子は、誰かから、「人を見た目で判断したり、差別したりしてはいけない」「誰にでも親切にしてあげなさい」というような大切なことを教わっていたのだらうと思います。そして、内心気持ち悪いと思いつつも、その気持ちを

乗り越えて、教わった大切なことを実践してくれたのだと思います。

ところが、中学校・高校と進み、思春期を迎えた私は、その大切な体験をすっかり忘れて、夏になると、暑いのを我慢して長袖シャツを羽織ってみたり、半袖の時は出来るだけ自分の左腕が死角になる場所を探してみたり、彼女が来ないのは左腕のアザのせいと決め込んでクヨクヨしたりしていました。

コンプレックスというのは、厄介なもので、ひとたび取りつかれてしまうと、何かちよつとしたことが起きても、すぐにそのコンプレックスに結びついてしまい、悩めば悩むほど深みにはまって、抜け出せなくなっていくのです。

「このアザで一生結婚出来ないかもしれない」

「何かの弾みで結婚出来たとしても、生まれた

子どもにアザが遺伝したらどうしよう…。そんな先のことまで考えて絶望するのですから始末に負えません。人からすれば大した問題ではなくても、当の本人にとっては一つひとつが大問題なのです。

やがて、大人になり、多くの人との出会いと信仰との出会いで、いつの間にかアザのコンプレックスからは解放されました。更には、思春期にクヨクヨと悩んでいたのが嘘のように、人並みに恋愛をし、結婚も出来、玉のような女の子を授かりました。

小学校のころ、「気持ち悪くないよ」と言って笑い飛ばしてくれたあの子の優しさが、今になって身に染みてうれしく、尊いものを感じま

す。

金光教の教えに、「互いに親切にし合えば、神様もお喜び、人もなお喜びである」というものがあります。少しの勇気を持って、少しの親切をするだけで、心を救われる人がいる。それを見て神様がお喜びになる。まだ小さかったあの子が、それを私に実践して見せてくれたのだと思います。

私の左腕のアザは、長い年月を掛けて私に大切なことを教えてくれたハッピーマークだったので



《先生のおはなし》

「人生の分かれ道」

東京都・大崎教会 田中さくら

私は以前、会社員として働いていました。楽しく働いていましたが、同僚と険悪な仲になったり、上司とけんかしてしまったり、人間関係の上に問題を抱えていました。また、何か嫌なことがあるとすぐに、「死にたい」とか「死ぬ」など、本気でそう思っていないくても、軽々しく口にしてしまう一面もありました。

五年前、そんな私の生き方を大きく変える出来事がありました。それは、ある男性との出会いがきっかけでした。

彼は東京にある金光教大崎教会で生まれ育ち

ました。当時、彼は世界中を航海する豪華客船で、フィットネスジムのトレーナーとして働いていました。ところが、二〇一一年、東日本大震災が起き、余りの被害の大きさに、「東北に行ってお役に立ちたい」と仕事を辞めて東北へ向かいました。その後一年間に渡り、津波で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市でボランティア活動をしていました。

金光教では、気仙沼教会を拠点として、ボランティアを受け入れ、復興支援活動や被災者の方々の心の支援が行われていました。

彼はそこで、現地代表として、避難所や仮設住宅を回って、どのような支援が求められているのか、被災者の方々のお話を聴いたり、物資の配布や、泥かきをしたり、またボランティア

がどんなお役に立てるのかを考えて企画したりする活動を行っていました。

その年の七月、私は震災からの復興支援をテーマにした金光教の集会に参加しました。そこで聞いたのが、彼の話でした。彼は、ボランティアが必要とされていること、またその大きな働きなどを熱く語り、「皆さんにも出来ること必ずあります」と呼び掛けました。私はそれまで、自分のことだけを考え、被災された方々のことを真剣に考えることはなく、ボランティアに行こうと思つたこともありませんでした。ですが、彼の話に心が動かされ、「私も役に立てるかもしれない！」と即、気仙沼へ行くことを決めました。

八月、初めて訪れた気仙沼で、津波による被

害の爪痕を見て、言葉を失いました。

仮設住宅の集会場へかき氷の提供に行かせてもらいました。一緒にかき氷を頂いていると、壮絶な津波の経験を語られる方もいました。中には、「聴いてくれてありがとう」と言つて涙を流される方もいました。

また集会場で遊び回る子どもたちを見て、「この子たちは一体どれだけ怖い思いをしたのだろう」と思うと、胸が痛みました。その日の夜、ボランティアが感想を話し合うミーティングがありました。私は、感想を話すうちに、抑えきれなくなった感情が込み上げ、涙があふれました。

東京へ帰つてからも、私の頭の中は気仙沼の人たちのことばいばいでした。また同時に、

自分が今生きているということは当たり前ではない、不思議なことのように思えてきました。

そしてふと、「生かされている」という思いと、「もつと人の役に立つ生き方がしたい！」という思いが心の底から湧いてきたのです。

一方彼は、引き続いて気仙沼の人々と悲しみや喜びを共にしていました。大切な人や生活を失った人の悲しみに触れては、教会でその人のことを神様に祈り、教会の先生に教えを頂いて、活動に当たっていました。

私は彼の生き方に触れて、「自分さえ良ければいい」という生き方をしてきたことや、神様に生かされている尊い命を軽く見ていたことを反省しました。

彼が大切にしていたのは、「人が人を助ける

のが人間である」という、金光教の教祖様の教えでした。神様は私たち人間が、人に親切を尽くし、人を祈り、助ける働きをすることを願っておられること、そして私たちといっしょに喜び、悲しんで下さっていることを知りました。

何の取りえもないと思っていた私が、神様に願われている…。そう思うと、何事にもやる気が湧き起りました。

それ以来、教会へお参りすることが多くなりました。職場での人間関係の問題を教会の先生に話すと、「相手のことを祈ってあげなさい」と教えられました。相手のことを悪く思うばかりで、祈るなんて考えもしていなかった私にとってそれは驚きの一言でしたが、それを機に、相手のことを神様に祈るようになりました。そ

うしていくうちに、それまでお互いに目を合わせることも出来なかつたのが、目を見て笑顔で会話が出来るようになり、関係がどんどん良くなりました。今では大切な友人です。相手を変えようとするのではなく、自分が変わらなければならぬということ、相手を祈る気持ちになることで、それまで見えなかつた相手の良いところが見えてくるということを教えて頂きました。

毎朝お参りするようになると、その他の多くの問題も良い方へ向かつていき、神様の働きを感じずにはいられませんでした。神様の願いを感じ、日々の命に感謝しながら生活をする、人生が明るく変わっていったのです。

彼はその後、金光教の教師となりました。今から三年前、私はその彼と結婚しました。そして共に神様の願いを現す生き方をしたいと思いい、教会で奉仕する人生を選びました。

大震災という大きな悲しい出来事から気付かされた命の尊さ。そして、苦しんでいる人を助けてやってくれと神様から願われている私たち。

生かされ、願われている命を、お役に立つように、輝かせていけたらと思います。



《信心ライブ》

「喜びの力」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録

音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、岡山県・金光教児島赤崎教会の藤井淳二さんが、平成二十七年四月、金光教光政教会においてお話されたものをお聞き頂きます。

母は交通事故に遭いまして、左足のひざ下を切断するという事故でありました。その時に、一命を取り留めたんでありますけれども、お医者さんから家族に対して、「意識が仮に戻ったとしても、足が無いことは絶対に伝えないで下

さい」ということでありました。どんなショックを受けるか分からんということだったんでしよう。それで、意識が戻りまして、父が面会に行きましたら、母が一番に、「足があるん？」と聞いてくるんですね。父は、お医者さんから止められていますし、言えませぬね。それで黙っておりますと、二回目です。「足があるん？」と言う。父はさすがに、ごまかしも効かなくなりましてね、「命さえあればなあ、何とかなるからな、元気出せよ」と、言わば、ごまかしたわけにあります。

そういう状況の中での第一歩を踏み出したわけでありますが、その後の生活の中で、決して母は塞ぎこんでおるわけではなく、普通に過ごしていくわけでありまして、不思議に思った父が

ですね、「あの時のあの言葉はどういうことじやったん？」と聞きました。あの時、自分が転んだ時にですね、まあ、大型トレーラーに引かれたんです。それで両足を引かれまして、片足はもう、あんまり具体的には言いませんけどね、

無くなると。右足も複雑骨折でありました。それで、倒された時に、行こうと思うんですけれども、立てないね。で、血のりが五メートルぐらい付いています。だから自分で這ってるんですね。それで、触ってみたら足が無かった。足が無いという記憶があり、力尽きて倒れたというか、五メートル這ってね。その記憶があつて気が付いたら病室、ICUですね、そこにおるということ。

その時にね、左足はもう無いんですけれど、

自分の中で足が無いのに、右のほうに何か指先のようなものが見えると。もしかしたら、足を残して頂いたんだらうかと思って、「足があるん？」と聞いたんだそうです。その言葉ですね、どれほど家族が助けられたか。

「足が無い」ということ。もう自暴自棄に陥つてもしようがないと思うんですよ。今まであったものが無くなる、失うという。どうにもならん。なぜ私の命を助けたのと恨んでもしようがないかも分からん。でも、もし、その時に母が自分の足が無いことを悲しみ、嘆き、助けられた命を恨んでいたならば、我々は本当に針のむしろどころではない世界に落ち込んでおったと思う。

母がですね、残された足をですね、喜ぶ。無

い足を嘆くんではなくて、残された足を喜んだ、その生き方がなぜ出来るのかと、信心つて一体何なんだろうかと、その不思議さ、それが私が金光教を知りたいと思っただきっかけなんです。

母の喜びの生き方があればですね、何でも支えてあげられるんですよ。これしてやろうか、あれしてやろうかと。もしこれが、逆に悲しみであつたらどうでしょうかね。そばにもおるのがつらいです。出来るだけ避けようと思います。そこには悲しみ以外には生まれてこない。苦しみ、悲しみ…。まあ人間生きていれば色々なことが当然あります。けれども、そのことじやなく、もっと恵まれたことを探していく。喜びをもつて見出していく。そういう生活の中には、必ずや幸せが、さらには温かいものが生まれて

くるんだということ。しかも、一遍に大勢の人がです、家族であり、お医者さん、その他の一切の関わりのある人。お見舞いに来られた人、祈りを込めて下さった大勢の方、袖をまくりながら輸血に来て下さった方々。そういう働きがですよ、生かされるんですよ。そこに不足を言っていたら、全てが死んでしまう。でも、それが生きてくる。そこにはまた更なる喜びが生まれてくる。その喜びは、一遍に大勢の人が助かっていく働きになっていく。ここなんです。

お礼の心、喜びの心は、誰にでも出来ることなんです。それをもつてすれば、一遍に多くの人たちが、一瞬にして助かっていく世界も生まれてくる。これが、お礼と喜びの力なんです。ですから決して難しいことではない。このこと

を自分が大切にしていくなこととして取り組んでいく、そのことによって、先々の運命は必ずや大きく変わってくるんだということ。そのことを強く強く私は思っておるところであります。

く。そんな喜びの生活を、皆さんも進めてみてはいかがでしょうか。

お母さんの交通事故。藤井さんが高校生の時の出来事です。無くなったことを嘆くのではなく、残されたものを喜び、感謝の心で毎日をごさされるお母さんの姿に、藤井さんは、人が生きていく上での大切なものを感じ取られました。そして、自らもそんな生き方がしたいとお母さんと同じ金光教の信仰の世界に進み、教師となりました。

どんな状況に置かれても、そこに喜びを見出していくことで、自分も周囲の人も救われてい



《先生のおはなし》

「神様のシナリオ」

広島県・安浦教会 山田泰弘

私は現在、金光教の教師をしていますが、ここにたどり着くまでに様々な出来事がありました。そしてそのほとんどは、自分の思い通りにならなかったことばかりです。

高校生の時は、家庭の経済状況を考えて、大
学へ進学したい気持ちを抑え、就職をしようと
決心したこと。就職試験では、第一志望の会社
を不合格になったこと。その後、地元の会社に
就職するものの、仕事の上で事故を起こしてし
まったことなど、挙げていけばキリがありません。
ん。

これらのことは、その時の自分にとっては都合の悪いことばかりです。そういうことが起ると、自分の中で、人や事柄を責める心、嫌だ
と思う心がニヨキニヨキと出てきます。「何で
僕だけ我慢しないといけないんだ…」「先生は
絶対合格するって言ったじゃないか…」「なん
で僕がこんな痛い目に遭わないといけないんだ
…」。

その時の自分にとっては何となく、
でしたが、今にして思えば、一つひとつの事柄
に、神様が私のためのシナリオを用意して下さ
っていたとしか思えないようなことが起きてい
ました。

まず、就職試験についてです。私は、A社を
第一志望にしていました。担任の先生からは、

「お前なら絶対に大丈夫」と太鼓判を押されての受験でした。しかし、結果は不合格。人生最大の挫折でした。

そこへ、二次選考として募集が掛かったのがお世話になったB社です。その時は知らなかったのですが、その業界ではシェア世界一の会社で、例年であれば二次募集など掛ける必要がない程の人気会社でした。そんな会社から、奇跡的に私の高校に二次募集が掛けられました。それを担任の先生から紹介してもらい、地元であるB社に入社することが出来ました。

実際入社してみると社員教育にも熱心で、業務を通して色々な経験を積むことが出来ました。培った技術や考え方は、金光教の教師となった現在にも活かされています。何より上司や

先輩、同僚にも恵まれ、そのつながりは退職した今も残っています。本当にこの会社に勤めることが出来て幸せだったと思います。

しかし、入社して半年が過ぎたころでした。研修中に私は事故を起こしてしまいました。硫酸という薬品が散って、目に入ってしまったのです。

表現出来ないような痛みと熱さにもだえ、「目が見えなくなるんじゃないか」という恐怖を抱えながら、応急処置をしてもらって病院に運ばれました。眼科の先生は、処置をしながら、「硫酸で良かったね」と言われました。「こんなに痛いのに、何てこと言うんだ！」と最初は思いましたが、私の勤めていた部署では、硫酸より

ももっと危険な薬品を扱っており、「もし他の薬品であれば、最悪の場合、失明の危険があった」ということでした。



病院で治療してもらった後、私の尊敬する先生に事の顛末^{てんまつ}をお話ししました。先生は、「これも、神様が作られたシナリオの中でのプロセスですからね。神様は無駄事はなされません」と仰られました。その時は、「どういうことだろう?」と思いましたが、実際、このことが原因で視力が落ちることもありませんでした。更に、この後に私が新入社員教育を受け持つようになり、後輩に対して自分自身の体験として薬

品の危険性を伝えることが出来たのです。後輩も生の体験話を聞くことで、気を付けてくれるようになりました。私がつらい体験をしたことが、本当に無駄にならなかったなあと思えた出来事です。

そんな中、私が神様の働きを一番感じたのは、父を看取ることが出来たことです。

父に病気が見付かり、入院していた病院が私の勤めていた会社のすぐ裏であったことで、毎日仕事の後にお見舞いに行くことが出来ました。私が病室に顔をのぞかせると、父はその時出来る精いっぱい笑顔で迎えてくれました。それは、お見舞いに来てくれた皆にそうでした。そして不思議なことに、父を元気付けるために来て、会話した多くの人が、逆に元気に

なって病室を出て行くという姿を度々目の当たりにしました。私は、そういう父の生き方を見て、跡を継いで金光教の教師になりたいと決心することが出来たのです。

もし高校生の時に自分の希望通りに大学へ進学していたら、大学入学と共に実家を飛び出していたでしょう。もし就職試験の時、第一志望のA社に合格していたら、転勤が多い会社でしたので、父の看病が出来なかったでしょうし、最期を看取することも出来なかったと思います。そして今の私はいないでしょう。

このように、後になって一つひとつを振り返り、思い直した時に、起きて来たこと全て、神様が将来の私が生きていくために用意して下さい、必要な出来事ばかりだったんだと考えさ

せられます。

自分にとって都合の良いこと、悪いことって何でしょう？ 自分の思い通りになることだけが良いことで、自分の思い通りにならないことは全て悪いことでしょうか？ もしも起きてくることが神様の作られたシナリオだとしたらどうでしょう。神様は、私たちの先の先を見通し、今この瞬間に必要なことを私たちに用意してくれているのではないのでしょうか。

私は今でも、起こってくること、その時々都合が悪いなあと思うことはたくさんありますし、責める心もまだまだ出ます。しかし、それも神様が用意して下さいった最高のシナリオとして、先を楽しみに受けていきたいと思えます。

《先生のおはなし》

「神様の段取り」

岡山県・天瀬教会 秋山世喜子

私は金光教の教師で、両親と共に教会で奉仕しております。

七年ほど前のことです。夜、父の様子がいつもと違います。話しかけても全く言葉が出て来ません。視線も合いません。

「病院に行きますか？」

母が何度か尋ねると、玄関の方に行きたそうな様子です。母と二人で支えながら玄関まで連れて行き、車に乗せ、私の運転で救急病院へと向かいました。

病院に着き、出して下さった車椅子に座らせ

たところで、父の意識はなくなっていました。幸い、他の患者さんがいなかったため、すぐに診察となりました。

大変なことになったと、大きな不安が押し寄せましたが、母が、「これもおかげの中で起こったことだから」と、平常心で私に対応してくれたので、落ち着くことが出来ました。

お医者さんに説明を受けると、のうこうそく脳梗塞ということで、この一週間で山であるということでした。たとえ命が助かったとしても、重度の障害が残るだろうということでした。

父が来た時には誰もいなかった待合室には、数人の患者さんが待つておられ、しかも、この日の当直は脳外科の先生でした。改めて、本当に間一髪のところを、命をつないで頂いたのだ

と感じました。

集中治療室へと移されると、父の意識が少し戻っていました。父は、私の顔を見ると、何やら必死に伝えようとしています。しかし機能に障害が起こり始め、言葉がうまく出てきません。左手で何か書こうとするので、紙とペンを渡すと、平仮名で三文字の言葉を何度も書いては首をかしげて消しています。

「おかか？」

私にはそうとしか読めませんでした。どうやら違うことを伝えたいようです。そこで、いろいろと尋ねていきました。

「明日、何かあるの？」と尋ねると、どうやら何かあるようです。

「分かった。帰って、予定を確認するから」。

私がそう言うと、安心したようでした。

夜中の二時頃になっていたのですが、帰ってすぐに予定を調べてみると、ご信者さんの墓前祭があると書いてありました。

つまり、「おかか」ではなく「おはか」のことだったのです。

しかし、午前の予定ですから、あと数時間後にはご信者さんが迎えに来られます。私は腹をくくり、父の代わりに祭典をさせて頂くことにし、母と二人で、急いで準備をしました。

実はこの数年前に、父と二人で書類の整理を一緒にしていましたので、祭典に必要な資料がどこにあるのかが分かっていたから出来たことでした。おかげで、無事に祭典が終わりました。

父はいろいろな役を務めていたので、その後、

各方面に事情説明とお断りの電話を、母と二人で手分けして掛けていきました。

父の状態はというと、初めは目の前にある「コップ」や「やかん」という言葉も出てこず、右半身の感覚がないため、「マネキンの腕がこんな所にある」と、自分の右腕を見て思ったこともあったようです。

しかし、少しずつおかげを頂き、詰まっていた血管から、針ほどの細さですが血液が通るようになってきました。少しずつ言葉も戻っていき、リハビリに一生懸命取り組んでいました。

倒れたのは十月で、年末に向けての様々な事務処理を、これも父に尋ねながら進めていきました。

実はこのことも、父が倒れる前私は、各教会

関係の書類を精査する事務所で一年ほど勤めた経験がありましたので、いつどのようなことをしないといけないかが分かっていたからこそ出来たことでした。

病室で父といろいろな引き継ぎをしていきました。有り難いことに、父は教会のことだけでは、きちんと覚えていてくれました。その姿に、父が何よりも神様のご用を大事にしていたのだというところが改めて伝わってきました。

必要な物がどこにあるか尋ねると、部屋の見取り図を書き、場所を示してくれました。私はその場所にある物を一式、病院へ持って行き、父と一緒に仕分けをしていきました。

そのような日々を過ごす中、入院中、病院から障害者の申請関係の書類を渡されています

た。

しかし、退院する時には、有り難いことに、ちよつと見ただけでは分からない状態まで回復し、障害者の申請が出来ないほどでした。

今もまだ、父のリハビリは続いております。

麻痺も残っていますし、思っていることと違う言葉が出ていることもあります。文章を書いたり、話をしたりすることも出来、自分の身の回りのことも自分で出来ます。

思い返してみると、祭典のことも、事務のことも、私が対応出来るように、神様が事前にあれこれと段取りして下さり、丁寧に育てて下さっていたのだと思わされます。

いろいろな役目を頂いたその時には、「ちよつと面倒だな」とか、「自分にはとても出来な

い」とか思ってしまうこともありましたが、「いやいや、これも神様の御用だと受けてきていたことが、先々で慌てないで済むおかげとなっていました。まさに父が倒れた時に母が言ってくれた「何事もおかげの中での出来事」なのだと思わせられます。

自分の力で何とかしようとしていたら、私は潰れていたかも知れません。知らず知らずのうちに、私自身、ここまで神様からお育てを頂いていたことに改めて気付かされ、そのことを忘れないようにお礼を申しながら、日々生活していきたいと思います。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

